

タガログ語の幸福論

A grammar of happiness in Tagalog

長屋 尚典
NAGAYA Naonori

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

はじめに

1. タガログ語の類型論的特徴
2. 「主語」の意味役割と動詞の形態
3. 感情と知覚のヴォイス
4. 「幸せ」と「悲しみ」

おわりに

キーワード：タガログ語、オーストロネシア語族、ヴォイス、心理述語、知覚表現

Keywords：Tagalog, Austronesian, voice, psych-predicates, expressions of perception

【要旨】

本論文は、タガログ語の「焦点」と呼ばれる動詞形態論による構文交替の分析を、心理述語・知覚経験述語に注目して行う。具体的には、この言語が主語の意味役割の違いを動詞形態論で表現し分ける言語であるという事実を記述・分析したのちに、*masaya*「幸せだ」と *malungkot*「悲しい」という二つの述語がこの一般化の例外になっており、主語が感情の持ち主であろうと感情を惹起する事物であろうと同じ述語の形態を用いるという事実を報告する。タガログ語において接辞のついた述語でこのような現象が見られることは稀であり、注目するべきである。

This paper presents a description and analysis of psych-predicates and expressions of perception in Tagalog. In this language, predicates change their form according to the semantic role of a subject NP by means of voice/valence-related morphology, often referred to as the ‘focus system’. In other words, different subject roles are marked on the predicate by different affixes. However, it is pointed out that there are two exceptions to this generalization: *masaya* ‘happy’ and *malungkot* ‘sad’. These two predicates do not change their form, whether their subject NP plays an experiencer role or a stimulus role.



はじめに

世界の言語は、どのような文法範疇について語形変化するか、あるいはしないかという点で異なっている。たとえば、英語は単数か複数かで名詞の形が変化する(e.g., *dog* と *dog-s*)。しかし、日本語では名詞は数によって形を変えることがない。もちろん人間を表す名詞なら「たち」を付与することによって複数の概念を表すことはできるが、義務的ではない。

一方で、古賀(2008)の指摘するところによると、日本語では行為の方向性について非常に敏感な言語であり、ある行為が話者の方向に向かっているのか、そうでないのかが文法形式に現れる。(1)と(2)を比較してほしい。

- (1) 私は野田さんをじっと見た。
 (2) a. ? 野田さんが私を見た。
 b. 野田さんが私を見てきた。
 c. 私は野田さんに見られた。

たとえば、(1)のように行為が話者から第三者に向かう場合は動詞「見た」だけで十分だが、(2)のように行為が第三者から話者の方向に向かう場合には、特に「野田さん」があまり話者にとって好ましくない人物である場合には、「られる」だとか「くる」のような要素を動詞に付与した方がずっと自然である。(2)aのような文は小説の地の文なら容認もできるかもしれないが、会話などでは使用できそうにない。

これから私たちが考えようとするタガログ語の場合、行為の方向性についてはまったく無頓着である。たとえば、次の例文(3)と(4)を比較しよう。

- (3) S<in>ipa =ko si= John.
 kick<RL.PV> =1SG.GEN P.NOM= John
 「私はジョンを殴った」
- (4) S<in>ipa =ako ni= John.
 kick<RL.PV> =1SG.NOM P.GEN= John
 「私はジョンに蹴られた」

(3)と(4)はどちらも *sinipa* 「蹴った」という動詞が用いられている。しかし、(3)では蹴る行為が話者からジョンに向かっているが、(4)ではジョンから話者に向かっている。(4)のような場合、日本語なら「蹴ってきた」とか「蹴られた」などを使うところであるが、タガログ語の

動詞はそんなニュアンスなどお構いなしにどちらにも *sinipa* という動詞を使う。

しかしながら、タガログ語は主格で標示される名詞句・代名詞(これをこの論文では「主語」と呼ぶことにする)の意味役割については極めて敏感な言語であり、主語の意味役割が何であるかによって述語が形を変える言語である。たとえば、(5) と (6) を検討しよう。

- | | | | |
|---------------|----------|------|----------|
| (5) Punas-in | =mo | ang= | putik. |
| wipe-PV | =2SG.GEN | NOM= | mud |
| 「泥をぬぐってください。」 | | | |
| (6) Punas-an | =mo | ang= | salamin. |
| wipe-LV | =2SG.GEN | NOM= | mirror |
| 「鏡をぬぐってください。」 | | | |

どちらの例文も語根として *punas* 「ぬぐう」を持っているが、どのような名詞句が主格で標示されているか、すなわち主語になっているかが異なっている。前者は「泥」という取り除かれる物体が主語になっており、このとき動詞は接尾辞の *-in* をとる。一方で、その物体が取り除かれる場所が主語になる場合、*-an* という接尾辞をとる。

このような交替現象は何も世界でタガログ語だけに見られるものだけではなく、細かい違いを気にしなければ、たとえば、バントゥ諸語などの言語に見られる適用や英語の構文交替現象などにも観察される。例文 (7) に示されているように、英語でも取り除かれる物体と取り除かれる場所のどちらを目的語にするかで交替がおきる。場所交替と呼ばれる現象である。ただし、英語の場合、交替にともなって動詞に形態変化が起こらないし、主語ではなく目的語の交替である。

(7) a. Jack wiped crumbs off the counter.

b. Jack wiped the counter.

本論文の目的は、タガログ語という言語が上記のように主語の意味役割についてきめ細かく動詞の形態を変える言語であることを、動作動詞から心理状態述語や知覚経験述語にいたるまで観察するとともに、この特徴の例外として *masaya* 「幸せ」と *malungkot* 「悲しい」が存在することを指摘し、その形式と意味について分析をすることである。ここで扱っている現象については、一部、すでに長屋 (2009) において吟味したことがあるが、今回は例外に特に焦点を当てて考えてみることにしたい。

本論文の構成は以下の通りである。第1節では、本論文の内容に必要な限りにおいてタガログ語の言語類型論的特徴を紹介する。第2節では、上記で紹介したような「主語」の意味役割にしたがって述語の形態が変わる現象について、動作動詞に注目しその仕組みを記述する。さらに、第3節では、その記述が心理状態と知覚経験を表現する動詞・形容詞にもあてはまることを観察する。その上で、第4節では、以上で述べてきたタガログ語の特徴の例外として「幸せ」と「悲しみ」を意味する語をとりあげ、分析する。「おわりに」で結論を述べる。

1. タガログ語の類型論的特徴

タガログ語はフィリピン共和国ルソン島中部マニラ首都圏およびその近郊地域で話され、オーストロネシア語族西マレー・ポリネシア語派に属する。この語派には、セブアノ語、イロカノ語などのフィリピンの諸言語やインドネシア語、マレーシア語などのインドネシア、マレーシアの諸言語が属している。タガログ語はそもそもフィリピン共和国マニラ首都圏およびその周辺地域の土着の言語であり、2000万を超える人々によって母語として話されているが、フィリピン共和国の公用語（このときは「フィリピン語」と称される）としての側面もあり、現在ではフィリピン全土で話されている。

言語類型論的に見た場合、タガログ語は主要部先行型言語であり、典型的他動詞文においてはVAPの語順をとる。たとえば、(8)のように動詞が最初に出てきて、その後に名詞句が続く。語順が日本語と真逆のため右から左にタガログ語を訳していくと日本語になる場合が多い。なお、Jollibee「ジョリビー」はフィリピンで大人気のファーストフードチェーンである。

- (8) K<in>ain ng= babae ang= spaghetti sa= Jollibee kahapon.
eat<PV.PFV> GEN= woman NOM= spaghetti LOC= Jollibee yesterday
「昨日、女性はジョリビーでスパゲッティを食べた。」

タガログ語の名詞句は格関係（主格、属格、場所格）、名詞クラス（普通名詞 vs. 個人名）、数について名詞マーカで標示される（表1を参照）。(8)でも、動詞 *kinain*「食べた」に続いて *babae*「女性」、*spaghetti*「スパゲッティ」、*Jollibee*「ジョリビー」という3つの名詞が用いられているが、それぞれ属格、主格、場所格で標示されている。

表1：タガログ語の格体系

	主格	属格	場所格
個人名(単数)	si	ni	kay
個人名(複数)	sina	nina	kina
その他	ang	ng [naŋ]	sa

タガログ語の動詞は相、動作主性、および「焦点」について語形変化する。相のパラダイムでは未然相、完了相、未完了相の 3 つを区別するが、それぞれの語形は接頭辞、接中辞、部分重複を複雑に組み合わせることで導かれる。動作主性については意図的動作と非意図的動作を区別するが、本稿で使用するのは全て意図的動作の形である。「焦点」はタガログ語の動詞を形成する際に用いられる一組の動詞形態論のことを指す。いわゆるヴォイスに関する機能を担うとされるが、単にそれだけでなく名詞化の機能も持ち、また、相や動作主性についての語形変化のパターンも決定する。詳しくは次節で扱うことにする。

本節を締めくくる前に本論文で用いるいくつかの用語について注釈が必要である。というのも、タガログ語を含むフィリピン・タイプと呼ばれる言語は、言語類型論的に見た場合、世界の他の言語と極めて異なる特徴を持っているため、その分析においては定説といえるものがない場合が多いからである。具体的な点については Himmelmann (2005) を参照していただくとして、本論文に関係する限りにおいて 2 点指摘しておきたい。第一に、タガログ語の語彙範疇をどのように設定するかについてはさまざまな議論がある。よく知られているように、タガログ語では動詞のような意味を持つ語群が、名詞のような意味を持つ語群と同じような統語論的性質を示すことがある。たとえば、両者は同様に名詞標識の直後に現れて指示表現として用いられる。そこで、本稿では形態論的な基準を用いて分類することにし、相について屈折するものを動詞、事物の属性を表現する語を派生する接頭辞 *ma-* をとまない、かつ相について屈折しないものを形容詞として認定する立場に立つ。

第二に、タガログ語に「主語」という文法関係が設定しうるのか、設定しうるとしても果たしてどの文法項を「主語」と呼ぶべきなのかについては長い論争があり、現在に至るまで決着を見ていない。このような問題が存在することを十分に認識したうえで、本稿では、主格で標示された名詞句を「主語」と呼ぶことにする。これは、主格名詞句が関係節化などのいくつかの文法現象で軸項 (pivot) として機能するという言語学的事実だけでなく、「主格で標示された名詞句」という冗長な表現を避けるという実利的な側面もあり、また、今回扱う現象を記述する限りにおいてもっとも適していると考えられるからである。筆者が必ずしも「主格で標示された名詞句」=「主語」という分析に賛同するものではない。

2. 「主語」の意味役割と動詞の形態

タガログ語およびフィリピン諸語は、「焦点」と呼ばれる動詞形態論を持つことで有名である。この「焦点」は具体的にはヴォイスについての接辞の一式をさすが、実際には名詞化標識の機能を持っていたり、それぞれの動詞の格フレームを決定したりするのみならず、相や動作主性についての語形変化にどのような接辞や重複を用いるかということまでも決定する。その体系

は表2のようにまとめることができる。なお、この論文では、行為者焦点、被動者焦点、場所焦点、その他焦点を表現する焦点接辞に、それぞれ AV = actor voice、PV = patient voice、LV = locative voice、CV = circumstantial voice という略号を付与している。

表2：タガログ語の「焦点」

	焦点接辞	主語の意味役割	代表的な格フレーム	完了相標識
行為者焦点	<i>mag-/<um></i>	動作主 / 被動者	NOM(S)	<i>nag-/<um></i>
被動者焦点	<i>-in</i>	被動者など	GEN(A)-NOM(P)	<i><in></i>
場所焦点	<i>-an</i>	受取手 / 場所など	GEN(A)-NOM(P)	<i><in></i>
その他焦点	<i>i-</i>	その他	GEN(A)-NOM(P)	<i><in></i>

この「焦点」接辞を利用することで、タガログ語は、主語の意味役割をめぐって興味深い構文交替を示す。いずれの場合にも主語の意味役割に従って動詞形態論が変化する。そのうちのいくつかを観察してみよう。まず、(9) (10) (11) では全て *bigay* 「与える」という語根を共有する動詞が用いられているが、それぞれ与える人、与えるもの、与えられた人が主語になっている。3つの文の真理条件的な意味は同じである。

- (9) Nag-bigay =ako ng= pera sa= bata.
 AV.RL-give =1SG.NOM GEN= money LOC= child
 「私はお金を子どもに与えた。」
- (10) I-b<in>igay =ko ang= pera sa= bata.
 CV-give<RL> =1SG.GEN NOM= money LOC= child
 「私はお金を子どもに与えた。」
- (11) B<in>igy-an =ko ng= pera ang= bata.
 give<RL>-LV =1SG.GEN GEN= money NOM= child
 「私はお金を子どもに与えた。」

次の3つの文は *lagay* 「置く」という語根を共通して持っている。(12) では「置く人」が、(13) では「置かれるもの」が、(14) では「置かれる場所」がそれぞれ主語として選ばれており、その事実が動詞形態論に反映している。やはり3つの文の真理条件的な意味は同じである。

- (12) Nag-lagay =siya ng= pera sa= lamesa.
 AV.RL-put =3SG.NOM GEN= money LOC= table

「彼(女)はお金を机に置いた。」

(13) I-ni-lagay	=niya	ang=	pera	sa=	lamesa.
CV-RL-put	=3SG.GEN	NOM=	money	LOC=	table

「彼(女)はお金を机に置いた。」

(14) Ni-lagy-an	=niya	ng=	pera	ang=	lamesa.
RL-put-LV	=3SG.GEN	GEN=	money	NOM=	table

「彼(女)はお金を机に置いた。」

この「焦点」現象を「主語の意味役割に従って動詞形態論が変化する現象」と記述するとき、このタガログ語の現象を英語や日本語の能動態と受動態の区別のようなヴォイス(態)と結びつけることもできよう。その理解はそれほど間違っていないものの、多少の留保が必要である。第一に、タガログ語の「焦点」形態論によって成立する動詞形態の対立は能動態と受動態の対立のような二項対立ではなく、表 2 からも明らかのように四項対立である。これを「態」と呼んでいいのか、呼ぶとしたらどのような「態」なのかは別に考える必要がある(Nagaya 2009 はそのような試みの一つである)。

第二に、タガログ語の動詞形態論によって表現し分けられる事象には伝統的に「ヴォイス」と呼び習わされてきた枠を超えてしまうものがあるからである。たとえば、第 3 節で詳しくみるように、タガログ語には心理状態の持ち主を主語にする動詞(*ma-*動詞)と心理状態を惹起する事物を主語にする形容詞(*nakaka-*形容詞)からなる述語の形態的な対立が存在する。英語ならこれを *satisfied* と *satisfying* という過去分詞形と現在分詞形の対立として表現するのだが、これをヴォイス現象に含めるのは一般的ではない。

第三に、そもそもこの言語では「主語」の概念が成立するかどうか十分な合意に至っていない。したがって、「主語」の概念をめぐる組み立てられたヴォイスの理論をそのまま適用できるかどうかはわからない。たとえば、被動者焦点形で被動者が主語である事実をもって受動態とする分析も考えられるし、実際そうする研究もあるが(e.g., Bloomfield 1917)、しかし、タガログ語の被動者焦点動詞構文のように動作主項がほぼ必須の文を、たとえ被動者が主語だとしても受動態と呼ぶべきではないという意見は根強い(柴谷 2002)。

3. 感情と知覚のヴォイス

本節では、タガログ語において、心理述語や知覚経験述語など、他の言語では必ずしもヴォイス現象に関与しないタイプの述語においても、主語の意味役割をめぐる述語が語形変化する現象が見られることを観察する。

3.1 心理述語のヴォイス現象

まずは、心理述語について観察してみよう。どの言語でもそうだが、心理述語によって表現される事象は、心理状態の持ち主と、その刺激すなわち心理状態の持ち主に特定の感情を惹起する対象の二つの参与者からなっている。タガログ語の心理述語の場合、(15)のように、心理状態の持ち主を主語にするか、心理状態を惹起する対象を主語にするかで、同じ語根を用いても述語の形態が規則的に変わる。

(15) 心理述語の構文交替：

- a. *ma-* 動詞 + 心理状態の持ち主_{NOM} + 心理状態の対象_{LOC}
 b. *nakaka-* 形容詞 + 心理状態の対象_{NOM} (+ *para sa* 心理状態の持ち主_{LOC})

心理状態の持ち主を主語にする場合には、動詞は *ma-* という接頭辞をとり、心理状態を惹起する事物は場所格で出現する。一方で、心理状態を惹起する事物が主語になる場合には、述語には *nakaka-* という接頭辞が用いられるが、こちらは形容詞なので活用はしない。この場合、心理状態の持ち主は文中に出てこない場合が多いが、あえていう場合には *para sa* 「～にとって」という前置詞句を用いて表現する。

この具体例を観察してみよう。(16) と (17) を見てほしい。

- (16) Na-gulat =ako sa= balita=ng iyon.
 PSYCH.RL-surprise =1SG.NOM LOC= news=LK DEM.DIS.NOM
 「私はそのニュースに驚いた。」
- (17) Nakaka-gulat ang= balita=ng iyon (para sa akin).
 PSYCH.ADJ-surpriseNOM= news=LK DEM.DIS.NOM for LOC 1SG.LOC
 「そのニュースは(私にとって)驚くべきだ。」

(16) と (17) では同じ語根 *gulat* 「驚き」が用いられている。しかし、(16) ではその語根に接頭辞 *na-* が添付され、その結果、ある刺激によって「驚き」という感情が惹起された経験者を主語にとる文が成立している。一方で、(17) では同じ語根に *nakaka-* という接頭辞が付与され、経験者ではなく「驚き」を惹起する刺激が主語となっている文を構成している。

もう一組の例を紹介しよう。(18) と (19) は両方とも話者が聞き手に対してジェラシーを感じている心理状態を表現しているが、(18) では話者が主語になり、(19) では聞き手が主語になっている。

- (18) Na-i-inggit =ako sa= iyo.
 PSYCH.RL-RDP~envy =1SG.NOM LOC= 2SG.LOC
 「私はあなたをうらやんでいる。」
- (19) Nakaka-inggit =ka.
 PSYCH.ADJ~envy =2SG.NOM
 「あなたはうらやましい。」

このようにタガログ語では、心理述語についてその持ち主を主語とする動詞文とその状態を惹起する刺激を主語とする形容詞文が交替を示す。このタイプの交替は広く心理述語全般に観察され、他にも、*galit*「怒る」、*inis*「イライラする」、*awa*「哀れむ」、*tuwa*「うれしい」、*takot*「怖い」、*hiya*「はずかしい」、*inip*「退屈だ」、*bigo*「失望する」などの語根がこの交替に出現する。

3.2 知覚経験のヴォイス現象

次に、知覚経験述語の場合を考えよう。知覚経験とは、知覚者がある対象について探索活動を行い、その結果、ある知覚内容を得る事象のことであり、知覚者と知覚対象の二者が必然的に関与する現象である。この知覚経験を表現する述語は、タガログ語において、(20)のように、やはりどちらを主語にするかで形を変える（その概要は既に長屋 2009 で論じた）。

(20) 知覚経験述語：

- a. *ma- -an* 動詞 + 知覚者_{NOM} + 知覚対象_{LOC}
 b. *ma-* 形容詞 + 知覚対象_{NOM} (+ *para sa* 知覚者_{LOC})

たとえば、(21) (22) のように共通の語根 *sarap*「おいしい」が用いられていても、主語の意味役割が何であるかによって動詞の形が変わるのである。

- (21) Na-sarap-an =ako sa= adobo =nila.
 PERCEPTION.RL-delicious-LV =1SG.NOM LOC= adobo =3PL.GEN
 「私は彼(女)らのアドボをおいしいと感じた。」
- (22) Ma-sarap ang= adobo =nila (para sa akin).
 ADJ-delicious NOM= adobo =3PL.GEN for LOC 1SG.LOC
 「彼(女)らのアドボは(私にとって)おいしい。」

化を伴って認識されるよりも、形容詞として静的な状態と認識される方が自然であるからだろう。

さらに、心理述語および知覚経験述語の交替においてどちらの構文が基本かという問題があるようにも思える。心理状態の持ち主が主語になっている文が基本であり、そこから心理状態を惹起するものが主語になっている文が派生されているのか、あるいはその逆なのかという問題である。しかし、この問題は、実際にはおそらくほとんど無意味であろう (cf. Pinker (2013:164-166) の心理述語における *cognitive ambiguity* についての議論も参照)。仮に読者が今この論文に興味深いと思いつつ読んでいるとしたら、それはこの論文に興味深い性質があるためだとも言えるが、一方で、読者がこの論文を主体的に読んだ結果だと考えることもできる。どちらが先とは言えない。この論文も読者も同様に主語として選ばれるポテンシャルを有していると考えられる。どちらも基本であると考えべきだろう。

4 「幸せ」と「悲しみ」

これまで論じてきたように、タガログ語は主語の意味役割に敏感に反応し、その違いを述語の形態の違いに反映する言語である。それは動作動詞であろうと心理状態や知覚経験についての述語であろうと同じであった。日本語や英語なら同じ形態を用いるであろう事象のペアに、異なる形態を用いるのである。さらにどのような形態の交替に参加できるかで動詞の意味的クラス (例: 心理述語や知覚経験述語など) も設定できることも確認された。タガログ語はこの点で一貫している。

しかし、本節ではここまで述べてきたタガログ語の動詞形態論の特徴についての唯一の例外として *masaya*「幸せだ」と *malungkot*「悲しい」という二つの述語を指摘する。まずは、*masaya*「幸せだ」の例を二つ見てみよう。

(25) Ma-saya =ako sa= Pilipinas.
 ADJ-happy =1SG.NOM LOC= Pilipinas
 「私はフィリピンに対して幸せだ。」(いて幸せだと思う)

(26) Ma-saya ang= Pilipinas.
 ADJ-happy NOM= Pilipinas
 「フィリピンは幸せだ。」(いと幸せになる)

(25) と (26) はどちらも *masaya*「幸せだ」を述語とする文である。(25) は話者がフィリピンにいる事実によって幸せを感じているということを表す文であるが、心理状態の持ち主である話

者が主格で、心理状態を惹起する事物であるフィリピンが場所格で出現している。一方で、(26)ではフィリピンという場所にいることが幸せであるという内容が表現されているが、心理状態を惹起する場所であるフィリピンが主格として、つまり主語として標示されている。つまり、この述語は、主語の意味役割の意味によって形を変えない。

「幸せ」というこの述語の意味から考えると、幸せは一種の心理状態に違いないから、(15)と同じ交替をしそうなものだが、実はそうではない。述語 *masaya* は活用せずこの形式でのみ用いられるし、予想される *nakaka-saya* という形態は存在しない(あるいは標準的ではない)。一方で、接頭辞 *ma-* がついているから、知覚経験と同じ(20)という交替をしてみてもよさそうなものだが、そうでもない。予想される *ma-sayah-an* という形態は存在しない(あるいは標準的ではない)。この論文では、タガログ語を、主語の意味役割をきめ細かく述語で表現し分ける言語として特徴付けてきたが、この述語に限ってはこの一般化が当てはまらないのである。例外中の例外である。

興味深いことに、「幸せ」の逆ともいえる *malungkot* 「悲しい」にも、(27)(28)のように、主語の意味役割が変わっても動詞の形が変わらない用法がある。

(27) Ma-lungkot =ako sa= nang-yari kagabi.
ADJ-sad =1SG.NOM LOC= AV.RL-happen last.night

「私は昨晚起きたことを悲しく感じる。」

(28) Ma-lungkot ang= nang-yari kagabi.
ADJ-sad NOM= AV.RL-happen last.night

「昨晚起きたことは(私にとって)悲しい。」

ただし、*malungkot* 「悲しい」の場合、(29)と(30)のように他の心理述語と同じ交替を示すことも不可能ではないので、「タガログ語は主語の意味役割の違いを動詞形態論で表現し分ける」という一般化の本当の例外は *masaya* 「幸せ」しかないと言える。なお、*nakaka-* を用いた(30)は(28)に比してより客観的な観察という意味をもっている。

(29) Na-lu-lungkot =ako sa= nang-yari kagabi.
PSYCH.RL-RDP~sad =1SG.NOM LOC= AV.RL-happen last.night

「私は昨晚起きたことを悲しく感じる。」

(30) Nakaka-lungkot ang= nang-yari kagabi.
PSYCH.ADJ-sad NOM= AV.RL-happen last.night

「昨晚起きたことは(一般的に)悲しい。」

さらに興味深いことに、この例外は意味によって決定されているというよりも、語彙的に決まっていると考えられる。たとえば、*masaya* と同じような意味を持っていると考えられる述語 *ligaya* 「幸せだ」は (31) と (32) のように知覚経験述語と同じ交替を行う。

(31) Ma-ligaya ang= nang-yari.
 ADJ-happy NOM= AV.RL-happen
 「その出来事は幸せだ。」

(32) Na-li-ligayah-an =ako sa= iyo.
 RL-RDP~happy-LV =1SG.NOM LOC= 2SG.LOC
 「私はあなたに(あなたと一緒にいることで)幸せを感じる。」

ただし、あまり標準的とは言えないかもしれないが、(33) のように、*maligaya* の主語に幸せを惹起する事物ではなく、幸せの当事者をおくことも可能であるようではある(インターネット上の用例検索ならびに聞き取り調査からの観察による)。すなわち、*maligaya* も非標準的でこそあるものの、*masaya* と同じような特徴を持っているといえるかもしれない。

(33) Ma-ligaya =ako sa= iyo.
 ADJ-happy =1SG.NOM LOC= 2SG.LOC
 「私はあなたに(あなたと一緒にいることで)幸せを感じる。」

このように、述語 *masaya* 「幸せ」と *malungkot* 「悲しい」(周辺の例であるものの、*maligaya* 「幸せ」) は、「タガログ語は主語の意味役割に応じて動詞の形態を変化させる言語である」という一般化に反している。このような現象はこの言語の述語としては例外的なものであり、特筆に値する。

おわりに

本論文では、タガログ語が主語の意味役割の違いを動詞形態論で表現し分ける言語であるという事実を、まずは動作動詞、次に心理述語・知覚経験述語をめぐって詳細に記述・分析してきた。さらに、その議論を踏まえたうえで、*masaya* 「幸せ」と *malungkot* 「悲しい」という二つの述語がこの一般化の例外になっているという事実を報告した。接辞のついた述語でこのよう

な現象が見られることは稀であり、注目すべきである。

しかし、なぜ *masaya*「幸せ」と *malungkot*「悲しい」という二つの述語だけが、このような例外になっているのか、という問題は依然として残っている。いったいなぜだろうか。考えられる答えの一つとして、「幸せ」と「悲しみ」という心理状態が、心理状態の持ち主とそれを惹起するものの二者の分化を拒むものであるからではないかということも考えられる。すなわち、既に論じたように、心理述語で上記のような交替が見られる認知的理由には、心理状態の持ち主がいるからこそそのような心理状態が生じるのか、それとも惹起する刺激があつてこそその心理状態なのか、どちらか判断しがたいことがある。持ち主と惹起物との間での方向性がどちらでもありうる。一方で、知覚経験述語についても、知覚者の探索活動があつてこそその知覚なのか、知覚の対象があつてこそその知覚なのか、知覚者と知覚対象における方向性はどちらでもありうるのである。二者が並立すればこそ、主語選択という問題も生じる。

この点、「幸せ」と「悲しみ」という現象は、心理状態を持ち主と惹起物の二者に分化することが難しい。すなわち、「私」が「フィリピン」にいて幸せを感じる時、それは「フィリピン」と「私」があらかじめ別に存在し、前者が後者の心理状態を惹起したという単純な図式に収まるようなものではなく、「私」と「フィリピン」が同時に幸せの経験者でありかつ惹起者であるような複雑な関係のかもしれない。むろん、これは単なる思いつきにしか過ぎないのだが、もしかしたらそうかもしれないという気もしないでもない。「幸せ」とは何か、「幸せ」とはどこにあるものなのか。結局は、よく分からないのである。

略号一覧

本論文で使用した略号は以下の通りである：ADJ-adjective, AV-actor voice, CV-circumstantial voice, DEM-demonstrative, DIS-distal, GEN-genitive, LK-linker, LOC-locative, LV-locative voice, NEG-negation, NOM-nominative, P-personal name, PERCEPTION-expression of perception, PL-plural, PSYCH-psych predicate, PV-patient voice, RDP-reduplication, RL-realis, SG-singular, 1-first person, 2-second person, 3-third person, (<)-infix, "="-cliticized, "~"-reduplicated.

謝辞

本稿に関する内容については以下の方から貴重な意見をいただいた：清水一樹、山本恭裕。また、東京外国語大学での授業に参加してくれた諸君にもお礼を言いたい。タガログ語話者として本論文を助けてくださった Florinda Amparo Adarayan Palma Gil 先生にも感謝している。言うまでもなく本稿に残るいかなる誤りも著者の責任である。なお、本論文は科学研究費補助金 #15K16734（代表：長屋尚典）、#15H03206（代表：松本曜）、#17H02331（代表：峰岸真琴）、#17H02333（代表：田窪行則）からの支援を受けている。

参考文献

Bloomfield, Leonard. 1917. *Tagalog Texts with Grammatical Analysis*. Urbana: The University of Illinois.
Himmelman, Nikolaus P. 2005. *The Austronesian languages of Asia and Madagascar: Typological*

- Characteristics. In: Alexander Adelaar & Nikolaus P. Himmelmann (eds.), *The Austronesian Languages of Asia and Madagascar*, 110–181. London: Routledge.
- 古賀裕章 . 2008. 「てくる」のヴォイスに関連する機能 . 森雄一、西村義樹、山田進、米山三明 (編)『ことばのダイナミズム』241–257. 東京 : くろしお出版 .
- 長屋尚典 . 2009. 知覚とヴォイス : タガログ語のヴォイス現象 . 日本言語学会第 139 回大会 , 神戸大学 , 神戸 , 2009 年 11 月 28–29 日 .
- Nagaya, Naonori. 2009. The middle voice in Tagalog. *Journal of the Southeast Asian Linguistics Society* 1:159–188.
- Pinker, Steven. 2013. *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*. New Edition. MIT Press
- Schachter, Paul, and Fe T. Otanes. 1972. *Tagalog Reference Grammar*. Berkley, CA: University of California Press.
- 柴谷方良 . 2002. 言語類型論と対照研究 . 生越直樹 (編)『対照言語学』11–48. 東京 : 東京大学出版会 .

